冥途

原作　内田百閒
脚本　今井一隆

【登場人物】

栄造
おれい／提灯１
岩佐／提灯２
女将／提灯３
作家／提灯４
春子／提灯５
秋子／提灯６
乙川／提灯７
冬子／提灯８
女／母／提灯９

＃１	小料理屋（１）	提灯群（栄造を除く全員）／女将、栄造、岩佐、女
＃２	書斎（１）	作家、春子、岩佐、秋子（声）
＃３	病室（１）	栄造、おれい
＃４	薬屋（１）	乙川、冬子、母、栄造
＃５	蕎麦屋	秋子、女将、作家、栄造
＃６	病室（２）	栄造、おれい
＃７	川岸	冬子、栄造、作家、春子、女将、女
＃８	書斎（２）	作家、岩佐、春子、秋子
＃９	薬屋（２）	乙川、冬子、母
＃１０	勝手口	母、おれい、栄造
＃１１	小料理屋（２）	全員

0

舞台上にはうっすらと霧のような煙が立ちこめている。
上手前、下手前にそれぞれ「彼岸花」の描かれたタペストリー。
それらの脇にそれぞれ踝の高さの小上がり。
小上がりの上に小さな四角い卓。
上手奥、下手奥には、「森」の描かれたタペストリー。
中央奥には大きな簾（すだれ）が二枚、下がっている。
簾の前に、膝の高さの小上がり。
その上に丸い卓袱台。

客入れラストの音楽。
音楽が高鳴り、客電が落ちる。
徳利とお猪口を持った栄造が現れ、卓袱台の前に座る。

1・小料理屋（1）

暗闇に赤提灯が浮遊する。
酩酊した頭で自問自答するかのように、あちこちから声が聞こえる。

提灯１　神がいる、という者と……
提灯２　いない、という者との間には……
提灯３　その「いる」とか……
提灯４　「いない」とかいう……
提灯５　言葉が食い違っているんだ。
提灯６　自分が「神はいない」……
提灯７　といったからって……
提灯８　それは「神がいる」……
提灯９　という者のつかった……
提灯１　「いる」という言葉を……
提灯２　否定したのではない。
提灯３　それがわからないのだからダメだ。
提灯４　それなら神を連れてきて見せるがいい。
提灯５　よしんば連れて来てみせたところで……

提灯６　それは「神がいる」……
提灯７　と思っている者の……
提灯８　神に過ぎないじゃないか。
提灯９　それは「いない」……
提灯１　という者の目に……
提灯２　神と見えるかどうだか……
提灯３　受けあわれたもんじゃない。
提灯４　しかし……
提灯５　それじゃ……
提灯６　こう考えたらどうする？
提灯７　それじゃ「神はいない」という者も……
提灯８　その否定する前に……
提灯９　ひとまず自分の神を……
提灯１　認めたことになってしまう。
提灯２　彼は否定するための神を……
提灯３　祀っているじゃないか。
提灯４　いるじゃないか、どうだ。
提灯５　いるじゃないか、どうだ。
提灯６　いるじゃないか、どうだ。

提灯７　いるじゃないか、どうだ。
提灯８　いるじゃないか、どうだ。
提灯９　いるじゃないか、どうだ。
提灯１　いるじゃないか、どうだ。
提灯２　いるじゃないか、どうだ。
栄造　とにかく！

音楽、止む。
提灯の群れの動きがぴたりと止まる。
そして左右に開くと、中央の小上がりで、栄造がお猪口を手に胡座をかいている。

栄造　とにかく神などいない。よしんばいるとしたところで、その神は否定の生贄（いけにえ）だ。バカなことを考えるのはよそう。決していない、断じていない！

栄造、お猪口に酒を注ごうとする。
空だった。

栄造　（奥に向かい）おーい、女将さん、おーい、女将さん！

と、提灯の群の中から一人、着物姿の女が歩み出る。

女　それはあなたいけませんです。
栄造　え？！（振り返る）
女　神様はいらっしゃいます。こちらへいらっしゃいまし。あたしがお連れ申します。

女、静かに去る。
提灯の群れ、上下に去る。

栄造　（女を見送り）……。

と、小料理屋の女将、現れる。

女将　はーい、はいはい。お呼びですか？
栄造　え？
女将　あ、お酒ですか？
栄造　あ、あぁ……。女将さん、今の人は……？
女将　今の人？
栄造　女の人。

女将　女？
栄造　今、ここにいた、着物姿の……。
女将　この店に、女は、あたしだけですけど。
栄造　いや、でも、今……。
女将　やだ、お客さん。そんな目で、あたしのこと、見てたんですか？
栄造　え？
女将　熱燗でよろしくて？
栄造　あ、うん……。
女将　少々お待ちを。

女将、徳利を持って去る。
と、岩佐、現れる。

岩佐　やあ、失敬、失敬。待ったかい？
栄造　え？　あぁ、いや……。
岩佐　道に迷わなかったかい？　ここいら、路地が入り組んでいてわかりにくいだろう？　おもてに大きな提灯が出ていたから。
栄造　あぁ。
岩佐

女将、徳利を手に戻ってくる。

女将　あら、いらっしゃい。
岩佐　やあ。
栄造　先に、やらせてもらってた。
岩佐　そうか。
女将　（徳利を置き、岩佐に）お知り合い？
岩佐　うん。中学の同級生。
女将　そうでしたの。
岩佐　しかし冷えるね、今日は。
女将　そう？　そんなことないでしょう？
岩佐　そうかい？
女将　むしろ暖かいくらいよ。
岩佐　あぁ、まあ、いわれてみれば、そうだね。
栄造　まあ、いっぱい。
岩佐　いや。（女将に）いつものを。
女将　はい。いつものね。

女将、去る。

栄造　よく来るのかい？
岩佐　ん？
栄造　この店。
岩佐　あぁ、まあね。で、なんだい？
栄造　ん？
岩佐　折り入って頼み事って。
栄造　あぁ、んん……。（言い出しかねて）岩佐、最近、どうだい？
岩佐　どうって？
栄造　いや、相変わらず、忙しいのかい？
岩佐　まあ、ぼちぼちってとこだよ。
栄造　そうか。
岩佐　君の方はどうなんだい？　学校は。担任、持たされたとか言ってたろう？
栄造　ん？　んん……、実は、辞めたんだ。
岩佐　え？
栄造　学校。
岩佐　辞めた？
栄造　あぁ。
岩佐　なぜ？

栄造　いろいろあってね。
岩佐　いろいろって？
栄造　いろいろったら、いろいろさ。
岩佐　……。いつ、辞めたんだい？
栄造　もう、ずいぶん前だよ。
岩佐　そうなのか……。
栄造　そういうわけで今、金がなくてね。
岩佐　まぁ、いいよ、ここは俺が払っとく。
栄造　すまない。……すまないついでに、少し貸してもらえないだろうか？
岩佐　何を？
栄造　……。（親指と人差し指で〇をつくる）
岩佐　金？
栄造　うん。
岩佐　いくら？
栄造　いくらでも。多ければ多いだけ助かる。
岩佐　多ければ多いだけって、限度があるよ。出版業界も傍から見るほど楽じゃないんだ。
栄造　……。

女将、お盆に徳利と、牛乳の入ったコップを載せて現れる。

女将　おまちどうさま。
岩佐　おぅ。
女将　あら。
岩佐　？
女将　糸くずが。

女将、岩佐の肩の糸くずを取ってやる。

岩佐　ありがとう。

女将、うきうきと去る。

栄造　何だい？　いつものって、牛乳かい？
岩佐　悪いかい？
栄造　いや、べつに悪かないけど……。

岩佐、牛乳を一息で飲む。

岩佐　あー、生き返る……。
栄造　そうだ。以前、君のところで、社員を募集していたろう？
岩佐　ん？
栄造　校正係。
岩佐　あぁ。
栄造　あれ、まだ、募集しているかな？
岩佐　どうだろう。
栄造　もし、募集しているようだったら、紹介してもらえると助かるんだが……。ちょっと聞いてみてもらえないだろうか？
岩佐　あぁ、まあ、聞いてはみるけれど……。
栄造　ほんとうかい？！　ありがとう。やあ、持つべきものは友だ。
岩佐　でも、僕に取り憑いてはイヤだぜ。
栄造　え？　何だい、トリツクって？
岩佐　妙な噂を耳にしたもんだからさ。
栄造　噂？
岩佐　うん。
栄造　どんな？
岩佐　君に見込まれた者には不幸が起きるって。
栄造　不幸？

岩佐　ん。
栄造　どういうことだい？
岩佐　（煙草を取り出し）君、先月、乙川（おとかわ）のとこへ行っただろう？
栄造　行ったけど……。え、誰に聞いたの？
岩佐　誰だっていいさ。火、あるかい？
栄造　え？
岩佐　火。
栄造　あ、いや、吸わないんだ。
岩佐　そう……。（諦めて煙草をしまう）そのとき牛男くんに会ったかい？
栄造　ウシオ？
岩佐　乙川の息子だよ。
栄造　あぁ、いや、会ってないけど。
岩佐　本当に？
栄造　本当だよ。
岩佐　本当に本当だね？
栄造　まあ、家のどこかにはいたようだけど……。
岩佐　ほら、やはりな、それだ！
栄造　なんだい？
岩佐　死んだそうだよ、乙川の息子。

栄造　え？！
岩佐　君が帰ってすぐ、ひどい高熱を出したらしい。いまわの際まで怯えてたって話だぜ。怖いよ、怖いよーって。
栄造　怖いって、僕がかい？
岩佐　君の他にいないじゃないか。
栄造　ちょっと待ってくれよ！　それじゃ何かい？　僕のせいで乙川の息子が死んだっていうのかい？　まるで僕が疫病神みたいじゃないか！
岩佐　違うのかい？
栄造　君、失礼なこと言うなよ！　いくら同級生でも言っていいことと悪いことがあるぞ！
岩佐　僕がいうんじゃないよ。
栄造　じゃあ誰が言うんだい？
岩佐　そういう噂があるって話さ。
栄造　……。
岩佐　校正係かあ。どうしようかな。
栄造　え？
岩佐　やっぱり止そうか。善意のお釣りが「呪い」じゃ、割に合わないし。けど、断ったら、なおのこと恨まれるのかい？
栄造　君！
岩佐　ハハハ、冗談だよ、冗談。そうやってすぐムキになるとこが昔から君の悪い癖さ。

栄造　僕は癖や冗談で言ってるんじゃないんだよ！　本当に困っているから、こうしてやってきて、君に頭を下げているんじゃないか！

岩佐　その困ってるのが、傍（はた）の者のせいのようになるんだって、みんなが噂してるんだよ。

栄造　……。

岩佐　うっ！

栄造　ど、どうした？

岩佐　腹が……。

栄造　え？

岩佐　ご不浄、ご不浄。

岩佐、便所に去る。

栄造　……。

栄造、一息に酒を呑む。

と、さっきの女が提灯を手に現れる。

女　参りましょう。

栄造　？

女　（遠くに目をやり）川の向こうも、もう日が暮れているのでございます。

女、去る。

栄造　（女の後ろ姿を見送り）……。

溶暗。
風の音。

2・書斎（1）

夜。

作家が、卓袱台で書き物をしている。

と、不意に風の音が止む。

作家、手を止め、万年筆を置く。

作家　……この頃毎日、夕方に風が吹いて、じきに止んでしまう。風の止んだ後が、急に恐ろしくなって、部屋の中に身をすくめたまま、手を動かすこともできない。しんとした窓の外を人が通る。閉め切った障子を透かして、その姿がありありと見える……。

と、どこからか咳の音。

作家　（ギクリとしてそちらを振り向き）……？

女中の春子が、水の入ったコップと風邪薬をお盆にのせて現れる。

春子　失礼します。先生、おかげん、いかがですか？

作家　ん？　あぁ……。

春子、コップを卓袱台に置く。

春子　どうぞ。
作家　帰ってきてるのかい？
春子　はい？
作家　あれ。
春子　あれ？
作家　秋子。
春子　あぁ。奥様でしたら、今日、同窓会で……。
作家　それは知ってるよ。じゃあ、お春かい？
春子　はい？
作家　咳。
春子　咳？
作家　今、そこで、咳を……。
春子　あたしじゃありませんよ。
作家　じゃあ、誰なんだい？
春子　先生では？
作家　え？

春子　ご自分の咳ではないですか？
作家　私の？
春子　ええ。
作家　私の咳を、私がわからないってことがあるかい？
春子　ひょっとして、熱がおありなんでは？　体温計、お持ちしましょうか？
作家　……いや、いい。
春子　そうですか。今日はもう、お薬飲んで、早くお休みになった方がよろしいですよ。こじらせるといけませんから。
作家　ほんとに、お春ではないんだね？
春子　はい？
作家　咳。お春ではないんだね？
春子　はい。
作家　……わかった。行っていい。
春子　では。おやすみなさい。
作家　あぁ、おやすみ。

春子、去る。
作家、薬を飲む。
と、再び誰かが咳をする。

作家　！

岩佐　（声）ごめんください。

岩佐、現れる。

岩佐　ごめんください。（咳をする）失礼。

作家　あぁ、なんだ、君だったのか。あんまり脅かさないでくれ……。

岩佐　もう、お休みでしたか？

作家　構わんよ。入りなさい。

岩佐　では。失礼します。

作家　どうした？

岩佐　どうも風邪をひいたみたいで……。

作家　そうじゃなくて。

岩佐　え？

作家　こんな時間に何の用だい？

岩佐　あぁ。

作家　締め切りは、来週のはずだろう？

岩佐　原稿の催促じゃないんです。

作家　じゃあ、何だい？
岩佐　べつに用事じゃないんですよ。
作家　え？
岩佐　学生時代の友人と、この近くで飲んでたもんですから、ついでに寄ってみたんです。つい二、三日前にも、そんなこといって、いきなり訪ねて来たばかりじゃないか。
作家　そうでしたか？
岩佐　そうだろう？
作家　そうでしたかね。どうも季節の変わり目は記憶が曖昧で……。
岩佐　え？
作家　しかし、今日はずいぶん暖かいでしょう？
岩佐　……。そうかい？
作家　寒くはないですよ。
岩佐　それは、そうだが……。
作家　うっ！

と、岩佐、手で胸を押えて顔をしかめる。

作家　ど、どうした？！
岩佐　肋（あばら）が痛いんです。

作家　アバラ？
岩佐　ええ……。それ、いただいて、いいですか？
作家　え？　あぁ……。

岩佐、コップの水を飲む。

作家　大丈夫か？
岩佐　……（溜息）落ち着きました。
作家　いったい、どうしたんだい？
岩佐　さぁ。
作家　さぁ、って。医者には診せたのかい？
岩佐　熱はないと思うんですけど……。
作家　そういう問題じゃないよ！　ちゃんと診せなきゃダメだ。
岩佐　すみません。
作家　今日は帰って、早く休んだ方がいい。

と、猫の声。
廊下で春子の悲鳴。

春子　（声）きゃ！
作家　（振り向き）……な、何だ？　おい、お春、どうした？
岩佐　あ、ちょっと僕、見てきます。
作家　あぁ……。

岩佐、去る。

岩佐　（声）お春ちゃん、どうしたの？
春子　（声）猫が……。
岩佐　（声）猫？
春子　（声）いきなり人の足もとをすり抜けて飛び出すんですもの。
岩佐　（声）あぁ、猫。ノラかい？
春子　（声）ううん。見たことないよその猫。やだわ。こんなとこ、いつの間に入ったのかしら？
作家　！

作家、急に何かを思い立ち、岩佐の座っていた場所に手を当てる。

岩佐　（声）春ちゃんは恐がりだなあ。
春子　（声）だってえ。
岩佐　（声）こっちへおいで。

作家　おい、お春、お春！　……お春、お春！

春子、現れる。

春子　先生、まだ起きてらっしゃったんですか？
作家　今、岩佐くんが来てただろう？
春子　はい？
作家　岩佐くんだよ。編集者の。
春子　あぁ。そうなんですか？
作家　そうなんですかって、今、そこで話してたじゃないか。
春子　誰がです？
作家　だから、お春がだよ！
春子　あたしが？
作家　話してただろう？　猫が、いきなり、どうこうって……。
春子　（原稿を目にして笑う）もう、先生、ご冗談ばっかり。
作家　え？
春子　新しい小説ですか？
作家　……。
秋子　（声）ただいまあ。

春子　あ。奥様、帰ってらした。それ、もう、片づけてよろしいですか？
作家　ん？　あぁ……。

春子、空のコップを手に取る。

春子　ほんとに、もう、お休みになった方がよろしいですよ。

春子、去る。

作家　……。

作家、書きかけの原稿を手に取る。
風の音。
と、四方から咳の音。
溶暗。

3・病室（1）

夕方。
中央の小上がりに、浴衣姿のおれいが、腰から下に毛布をかけ、座っている。
傍らの椅子に栄造が腰掛けている。
おれい、咳をする。

栄造　大丈夫？
おれい　うん。……何？
栄造　ん？
おれい　何か言いたそうな顔してる。
栄造　いや……、少し痩せたんじゃないか？
おれい　そう？
栄造　痩せたよ。
おれい　目方は変わってないと思うけど。
栄造　ちゃんと食べてるの？
おれい　……。
栄造　ダメだよ、食べなきゃ。いつも、飯は、どうしてるの？
おれい　どうしてるって？

栄造　誰かがここに運んでくれるの？
おれい　自分でもらいに行くのよ。
栄造　病人なのに？！
おれい　仕方ないのよ。ここではみんなそうなんだから。どこか遠くの方で、じゃらん、じゃらんと鉦（かね）が鳴ると、病室で寝ている人が一斉に、むくむく起き出して、そこの廊下を歩いて行くのよ。
栄造　（想像して）……。
おれい　今、気味が悪いって思ったでしょう？
栄造　え？　いや、そんなことはないよ。
おれい　そう？
栄造　思わないよ。どうして？
おれい　ほんとは、ここ、耶蘇（やそ）の病院らしいの。
栄造　知ってる。
おれい　はじめは、市の病院に入れるような話だったの。だけど病人がいっぱいで、空（あ）かないんですって。それでここに入れられるって聞いて、あたし、二晩も三晩も眠れなかったの。
栄造　ここだってそんな悪くないじゃないか。
おれい　耶蘇は好かないんですもの。
栄造　どうしてそんなに耶蘇を嫌うんだい？

おれい　だって恐ろしいじゃない。
栄造　恐ろしい？
おれい　恐ろしいわ。
栄造　何が恐ろしいの？
おれい　前に話したこと、あったでしょう？
栄造　え？
おれい　子供の頃、近所の救世軍から太鼓をたたく音がするもんだから、聞きに行って……、話したこと、あったでしょう？
栄造　いや。
おれい　嘘。話したわ。
栄造　……それで？
おれい　え？
栄造　太鼓の音を聞きに行って、それで？
おれい　あぁ。それで、あたし、うっかり中に入ってしまったのよ。入ったら最後、戸を閉められて、二度と帰してもらえないの。
栄造　そんなバカなことはないよ。現に、おれいは、ここにいるじゃないか。
おれい　そうなのかしら？
栄造　何？
おれい　なんだかそういう感じがしないの。

栄造　……。もういいんじゃないか？
おれい　？
栄造　体温計。
おれい　あぁ……。

おれい、腋の下から体温計を取り出す。

栄造　貸してごらん。

栄造、おれいの手から体温計を受け取る。

栄造　（体温計を見て）あぁ、まだ、ずいぶんあるじゃないか。
おれい　フフフ……。
栄造　何？
おれい　おかしなことを思い出したもんだから。
栄造　おかしなこと？
おれい　うんと子供の頃、熱を出すと、母親が体温計持ってきあたし腋の下に差し込むもんだから、あたし、体温計って熱を冷ますためのもんだと思ってた。
栄造　あぁ……。少し眠ったら？

おれい　眠れないの。
栄造　ダメだよ。よく寝て、よく食べて、早くよくならないと。
おれい　だって毎晩、猫がやって来て、寝床の敷居で夜通し爪を研ぐでしょう？
栄造　猫？
おれい　あぁ、いやだいやだ。思い出しただけでもゾッとする。
栄造　……そんなのは、夢だよ。
おれい　夢なもんですか！　現にここへ来る途中、その猫を見たんだから。
栄造　え？
おれい　町の坂道を車で下って行ったら、崖から急に猫が飛び出して、助手席の窓にぴったり張りついたのよ。それっきりあたし、なんにもわからなくなって、気がついてみたらここに寝ていたの。
栄造　……。少し、横になった方がいい。
おれい　大丈夫。
栄造　だって、つらいだろう？
おれい　悪いわ。
栄造　何が？
おれい　せっかく来ていただいたのに。
栄造　僕のことは気にしないでいいから、横になりなさい。
おれい　あたしね、あなたが今日、来てくださること、わかっていたの。

栄造　え、どうして？
おれい　わかるのよ、あたし、そういうの。
栄造　……。

やや間。

栄造　あいつは、どうなんだい？
おれい　え？
栄造　あの男は、見舞いに来ないのかい？
おれい　……。
栄造　今まで、一度も？
おれい　だって、仕方ないのよ。
栄造　仕方ない？！　何が仕方ないんだ。
おれい　そういう人なんだもの。
栄造　そういう人を選んで、おれいは後悔してないの？　僕を捨てて……。
おれい　……。
栄造　……止そう。こんな話をしに来たんじゃない。……そうだ、おれい、何か欲しい物はない？　食べたいものとか。
おれい　食べたい物って、べつに、ないの。

栄造　でも、何か言ってごらんよ。何が食べたい？　この次、来るとき、持ってきてあげる。
おれい　そうね……。ときどき、ミカンとカツレツが食べたいと思うことがあるけど。
栄造　ミカンとカツレツ。
おれい　でも、ミカンは看護婦さんが買ってきてくださるから。
栄造　じゃあ、カツレツだ。
おれい　栄造さん、覚えてる？
栄造　何？
おれい　昔、まだ私たちが婚約してたとき、川向こうの洋食屋で食べたカツレツ。
栄造　あぁ。
おれい　あれ、美味しかったわ。でも、ほんのちょっぴり……。

鉦の音。

おれい　あ。
栄造　（音の方に目をやり）……飯かい？
おれい　うん。
栄造　いいよ。僕が取ってきてやる。（と、立ち上がる）
おれい　ううん、自分で。
栄造　いいよ。熱があるんだから。

おれい　ほんとに、大丈夫だから。今日は、来てくれて、どうもありがとう。

おれい、ふらふらと去る。

栄造　（その後ろ姿を見送り）……。

照明が変わる。

夜。

栄造　病院を出ると、すっかり日が暮れていた。昼の景色は、闇の底に沈んでしまった。川の流れる音がした。風が吹いて、蘆の原が、さあさあ鳴った。私の足音が、私の後ろから、ひたひた追いかけるように聞こえてきた……。

と、女が提灯を手に現れる。

女　いいえ、それは私の足音です。

栄造　！（振り返る）

女　早く参りましょう。

栄造　いや、でも……。

女　河原の蘆の茎が、一度に焼けているのです。何千も何万も。今にここいら一面に焼けて参ります。

栄造　蘆？

女　ですから、早く、参りましょう。

女、去る。

栄造、一人残る。

蘆の原を眺める。

栄造　……。

暗転。

4・薬屋（1）

昼。
上手の小上がりに割れたガラス瓶。
中央の小上がりで、乙川が飯を食っている。
下手の小上がりでは、女中の冬子が鞠のような巨大な薬を丸めている。

乙川　（たくあんを嚙る）
冬子　（その音に作業の手を止め）……あのぅ、旦那様。
乙川　何だ？
冬子　あ、いえ……。（仕事に戻る）
乙川　（味噌汁を飲む）
冬子　あのぅ……。
乙川　何だい、ひとが食ってるときに！
冬子　私も、お昼ご飯をいただいてもよろしいでしょうか？
乙川　あ？
冬子　お昼ご飯……。
乙川　……。終わったのか？
冬子　はい？

乙川　丸薬（がんやく）は、丸め終わったのか？
冬子　あ、はい。もう半分ほど、丸め終わりました。
乙川　半分？！　まだ半分？！　おまえはいったい今まで何をやっていたんだ？！
冬子　……すみません。

玄関でギリギリと音がする。

乙川　（そちらに目をやり）？
冬子　あ、あたし、見てきます。

冬子、去る。

乙川　まったく……。

乙川、飯を食っている。
たくあんを嚙る音。
まもなく冬子、戻ってくる。

冬子　大丈夫です。

乙川　何だ、大丈夫って？
冬子　誰もいらしたのではありません。
乙川　じゃあ、何だったんだ？
冬子　おおかた、野良猫か何かでございましょう。
乙川　野良猫？
冬子　はい。
乙川　……。帰ったということはないのだな？
冬子　野良猫がですか？
乙川　そうじゃないよ。誰か大事なお客が来て、帰った後ということはないのだな？
冬子　あぁ、はい。
乙川　なぜ、そういえる？
冬子　はい？
乙川　お客が来て、帰った後でないと、どうしていえる？
冬子　そうなんですか？
乙川　私が聞いているんだよ！
冬子　お客というのは、どなたでしょうか？
乙川　そんなの「どなた」だっていいんだよ！　根拠を聞いてるんだ、根拠を。
冬子　コンキョ？
乙川　理由だ。なぜ、お客が来て帰った後でなく、野良猫だといえるのか。

冬子　……。あ！　そういえば、さっき、まことに小さな方が玄関から上がってまいりました。
乙川　何？！
冬子　まことに小さな方が、式台に、こう両手をついて……。
乙川　バカ！　どうしてそれを早く言わない！

乙川、箸を置き、大急ぎで玄関に去る。

冬子　（それを見届けて）……。

冬子、そろりと卓袱台の前に座る。
たくあんに手を伸ばし、一枚、食う。
味噌汁を飲む。
と、乙川、戻ってくる。

乙川　気をつけろ！
冬子　！（むせる）

冬子、あわてて小上がりから下りる。

乙川　あんなお客がどこにある？！
冬子　……え？
乙川　あれは、山蟻じゃないか！
冬子　ヤマアリ？
乙川　（溜息）まったく、おまえときたら……。
冬子　すみません。あたし、てっきり……。
乙川　謝って済むことじゃない。ほんっと、おまえのように頼みがいのない女中はない。
冬子　次から気をつけます。
乙川　次なんて、ない！
冬子　え？
乙川　もう、今日という今日は堪忍袋の緒が切れた。荷物をまとめて今すぐ出ていけ！
冬子　……。
乙川　聞こえなかったのか？　今すぐ出て行けと言ったんだ。
冬子　いや、でも、旦那様、まだ、丸薬が……。
乙川　その丸薬を盗みに来たんじゃないか！
冬子　え、どなたがです？
乙川　だから山蟻だよ！

女が現れる。

乙川の母である。

母　お客様がお見えだよ。
乙川　え？
母　玄関に、お客様が。
冬子　あ、それは違うんです。山蟻なんです。
母　ヤマアリ？
乙川　（冬子に）おまえはちょっと黙ってろ。（母に）誰です？
母　何？
乙川　お客って？
母　あぁ、えっと……、誰だっけ？
乙川　まったく、どいつもこいつも……。

乙川、去る。

母　（割れたガラスの瓶を認め）……何だい？（と、近寄って）
冬子　あぁ、それ、クマンバチの……。
母　クマンバチ？
冬子　はい。旦那様が捕まえて、瓶の中に閉じ込めておいたんです。羽をふるわすたびに、瓶の口

を塞いだ紙がオルガンみたいに鳴るもんで、坊ちゃまが欲しがりまして。
母　牛男が？
冬子　それが、あんまりしつこいもんですから、旦那様がカッとなって瓶ごと外に放り投げたんです。
母　まったく短気なんだから。で、どこに行ったんだい？
冬子　どこかに飛んで逃げてしまいました。
母　じゃなくて、牛男は？
冬子　あぁ、坊ちゃまでしたら、奥の部屋に籠もってしまわれました。何やら「怖いよ、怖いよ」とおっしゃって。
母　怖い？
冬子　はい。
母　何が、怖いんだい？
冬子　さぁ。
母　……。
冬子　それより大奥様。
母　ん？
冬子　あたし、やっぱり、出て行かなければいけませんか？
母　出て行く？
冬子　今すぐ荷物をまとめて出て行けと、旦那様が……。

母　お冬、また何かやらかしたのかい？
冬子　みたいです。
母　しょうがないねぇ。あの子には、あたしから言っておいてあげるから、さっさと仕事に戻りなさい。
冬子　ありがとうございます！　あの、その前に……。
母　何？
冬子　お昼ご飯、いただいてよろしいですか？
母　……。さっさと食べちゃって。
冬子　了解です！

冬子、去る。
母、瓶を手に取る。

母　あ。

蜂が飛び立つ音。
と、乙川、戻ってくる。
続いて栄造、現れる。

乙川　しかしよくわかったね。学生時代に、来たことがあったかい？
栄造　名簿だよ。
乙川　名簿？
栄造　同窓会名簿。そこに住所が載ってる。
乙川　あぁ、そうか、そうか。ま、入りたまえよ、狭いとこだが。母さん、お茶をいれてもらえますか。
母　はいはい。これ、捨ててしまうよ？
乙川　あぁ、はい。

母、去る。
栄造、その後ろ姿を見送る。

乙川　しかし奇遇だな。ちょうど今、妻も、同窓会に行ってて留守なんだ。
栄造　……。
乙川　どうした？
栄造　ん？　あ、いや、以前、どこかで会ったような……。
乙川　誰に？　母さんにかい？
栄造　うん。
乙川　今、玄関で会ったんだろう？

栄造　え？　……あぁ、そうか。それも、そうだね。あ、食事中だったかい？　すまんね。
乙川　構わんよ。
栄造　どうぞ、僕に構わず食ってくれ。
乙川　そうかい？

乙川、飯を食う。

乙川　（食いながら）で、何の用だい？
栄造　んん……。どうだい、最近。
乙川　ん？
栄造　景気は？
乙川　あぁ、まぁ、ぼちぼちってとこさ。
栄造　そうか。
乙川　食うかい？
栄造　いやいや。……この際、単刀直入にいうけど、少し金を貸してもらえないだろうか？
乙川　金？　いくら？
栄造　いくらでも。多ければ多いだけ助かる。
乙川　いきなり、そう言われてもなあ。
栄造　無理を承知で言ってるんだ。

乙川　どうしたんだい？
栄造　実は、勤めていた学校を辞めてしまって……。
乙川　そうなのかい？
栄造　うん。
乙川　そうなのか。でも、何に使うんだい？
栄造　身内が入院していて……。
乙川　奥さんかい？
栄造　ん？　いや、んん……。
乙川　親には話してみたかい？
栄造　二人ともとっくに死んだよ。
乙川　そうか。貯金はないのかい？
栄造　……。
乙川　そりゃ困ったな。（飯を食いながら）うちもカツカツなんだ。春から牛男が学校でね。
栄造　ウシオ？
乙川　倅。
栄造　あぁ……。
乙川　悪く思わないでくれ。
栄造　いや、僕のほうこそ、いきなり訪ねてきて、こんなこと……。
乙川　丸薬だったら、安く分けてやることができるんだがなあ。

栄造　ガンヤク？
乙川　（持ってきて）格安で、分けてやれるんだがなあ。
栄造　……。

やや間。

乙川　あ、そうだ。岩佐を訪ねてみたらどうだい？
栄造　イワサ？
乙川　同級生にいただろう？　ほら、いつだったか、同窓会で会ったじゃないか。どっかの大学を卒業して、親父のコネで雑誌社に勤めたっていう……。
栄造　あぁ、岩佐！
乙川　思い出したかい？
栄造　住所、わかるかい？
乙川　同窓会名簿に載ってるだろう？
栄造　あぁ、そうか。そうだね。じゃ、早速、ちょっと訪ねてみるよ。
乙川　ほんとうにいいのかい？（と、丸薬を）

母、お盆に湯飲み茶碗を載せ、現れる。

栄造　どうも、おじゃましました。
母　あ、お茶……。

栄造、去る。

母　……おかしな人だね。
乙川　（飯を食いながら）ええ。
母　誰なんだい？
乙川　さぁ。中学の同級生らしいんですけど、まるで憶えていないんです。

そこへ冬子、駆け戻る。

冬子　た、た、大変です！
乙川　なんだ、お冬、まだいたのか。さっさと荷物をまとめて……。
冬子　坊ちゃまが……。
母　牛男が、なんだい？
冬子　坊ちゃまが、ものすごい熱で……。
母・乙川　え？

音楽。
溶暗。

5・蕎麦屋

中央の卓袱台に作家、作家の妻・秋子、女将。
卓袱台に、水の入ったコップが三つ。

秋子　だけど本当に、もういけないのかしら？
作家　んん……。
女将　お午過ぎから急に目にツヤがなくなったんです。
作家　そう。
秋子　でも、見えてることは、見えているんでしょう？
女将　見えてるような気もするんですけど、よくわからないんです。
作家　わからない？
女将　ゆうべ、救急車を待ってる間、うつろな目をして、おかしなこと言いだすし。
秋子　おかしなことって？
女将　店の戸棚の鱚の子を先生にあげてくれって。
秋子　鱚の子？
女将　ええ。
秋子　この人に？
女将　ええ。

秋子　（作家に）あなた、どういうこと？
作家　いや、私に聞かれても……。
秋子　（女将に目をやり）……。
女将　あたしにもよくわからないんですけど。岩佐さん、そう言ったきり、眠り込んでしまったから……（コップを手に取り）あら？　奥さん、あたしの水、飲みました？
秋子　え？
女将　さっき、ここまであったのが、ここまでに減ってる。
秋子　飲みませんよ。
女将　じゃあ、先生？
作家　まさか。
女将　おかしいわねえ。
作家　ご自分でお飲みになったんじゃないですか？
女将　え、あたしが？
作家　ええ。
女将　自分で飲んで、わからないってことがあります？
作家　でも、それ以外にないじゃないですか。
秋子　そうですよ。（水を飲み）ほら。
女将　あぁ、なんだ、そういうわけですか。だけど、うちの戸棚に鱈の子なんてあったかしら？
作家　（突然大声で）あるじゃないか！

女将　え？
作家　あ……、すみません。あるかないか知りもしないで、うっかりそんなことを……。
秋子　しかし遅いわね。
作家　え？
秋子　お蕎麦。あたし、注文しましたよね？
作家　あぁ。しただろう？　さっき、自分でしてたじゃないか。
秋子　でしょう？　あたしもそうじゃないかと思ったんですよ。（栄造を認め）あら。

栄造、現れる。
一同、彼に注目する。
栄造、上手の座敷に腰掛ける。

女将　あ！

女将、栄造の傍らへ行き、顔を覗き込む。

女将　やっぱり！
栄造　？
女将　あなた、ゆうべの……。

栄造　……あぁ、小料理屋の……。
女将　どうしたんです、こんなところで？
栄造　ちょっと、そこの病院に……。
女将　病院？
栄造　お見舞いに……。
女将　岩佐さん？
栄造　はい？
女将　お見舞い。岩佐さん？
栄造　岩佐？

女将、泣く。

栄造　え、岩佐、入院してるんですか？
女将　（頷く）
栄造　どうしたんです？
女将　車にはねられたのよ。
栄造　いつ？！
女将　ゆうべ。
栄造　どこで？！

女将　店の前で。
栄造　店の前で……。それで、岩佐の様態は？
女将　小鼻の形がすっかり変わってしまったの。
栄造　小鼻？
女将　命に別状はないと思うのだけど……。
作家　いいや、ありゃ、もう、ダメだ！　助からない。
秋子・女将・栄造　え？
秋子　あなた、何を言ってるの？
作家　……や、違う違う、私が言ったんじゃない。だって私は、そんなこと微塵も思ってないんだから。
秋子　思ってもみないことを口にします？
作家　だから、私じゃないってば。
秋子　だって、現に聞きましたよ？
女将　私も聞きました。
秋子　でしょう？
作家　でも、ほんと、私じゃないんだってば。
秋子　じゃあ、誰が言ったんです？
作家　あ、いや……。
秋子　誰が言ったんです？！

作家　（栄造が目に入り）、そいつ。（と、指さす）

秋子、女将、栄造の方を振り返る。

栄造　……え、僕ですか？！
女将　そうだったの？！
栄造　いや、僕は何も……。
女将　ひどい！

女将、泣きながら去る。

栄造　……。

作家と秋子、黙って栄造を見ている。
まもなく女将、復讐心に燃え、水差しとコップを手に戻ってくる。
コップに水を注ぎ、栄造の前に置く。

女将　お飲みなさい。
栄造　……どうも……。

女将　ひ！

と、女将、中央の小上がりへ駆け戻る。

女将　しゃべった、しゃべった！
秋子　何、何、何ですって？
女将　「どうも」ですって！
秋子　まあ！「どうも」！
作家　え、え、それだけ？
女将　まだ、これからですよ。これからきっと、驚くべき預言をするんだわ。
作家　そうか、これからか。
秋子　これからね。
栄造　……。

栄造、水を飲む。

女将　あ、飲んだ、飲んだ！
作家　きたか！
秋子　預言するのね！

女将　まだよ、焦りは禁物。
秋子　そうね、禁物ね。
栄造　……。
秋子　でも、なんだか似てると思いません？
作家　何が？
秋子　あの男。
女将　似てるって、何に？
秋子　それがどうもはっきりわからないの。間違いなく似てるんだけど、思い出せない。でも、見れば見るほど、やっぱり似ているわ。ねえ、あなた、そう思いません？
作家　……あぁ、確かに、言われてみれば。
女将　そんなに似てますか？
秋子　そりゃあ、もう、そっくり。
女将　まあ！
秋子　さぁ、もっとお飲みなさい。ぐぐぐいっと。
栄造　……。

栄造、うつむいている。

秋子　どうしたのかしら？

作家　ことによると、今日ではないのかもしれない。
秋子　え？
作家　きっと、よほど重大な預言をするんだよ。
秋子　重大な？
作家　うん。とてつもなく。
秋子　とてつもなく……。

秋子、ぶるぶる震えだす。

秋子　とてつも……。
作家　どうした？
秋子　なんだか恐ろしくなってきた……。あの様子じゃ、どんな恐ろしい預言をするか知れないわ……。
作家　いやいや、まだ悪い預言と決まったわけじゃないんだから。
女将　そうよ、奥様、悲観的になってはダメ。
秋子　いいにつけ、悪いにつけ、そんな預言は聞かない方がいいわ！
栄造　あのぅ……。

栄造が立ち上がる。

秋子　あああああああああああああああああああああああああああああ！

秋子、両手で耳をふさいで逃げ去る。

栄造　……。

女将　……殺しましょう。

作家　え？

女将　まだ何も言わないうちに、殺してしまいましょう。

女将、割り箸立てから割り箸を取る。
箸を二つに割り、そろりと栄造に歩み寄る。

栄造　それで、岩佐の病室は……。

女将　あああああああああああああああああああああああああああああ！

女将、逃げ去る。

作家　あ、ちょっと、待ってください！　一人にしないで！

作家、去る。
雨の音。

栄造　……死ぬのはちっとも構わない。こんなものに生まれて、いつまで生きていても仕方がない。けれど預言をするのは困る。何を預言すればいいんだか見当もつかない。あの連中は皆、私の口から一言の予言を聞くために、ああして私に近づいてくるのだ。もし私が何も予言しないと知ったら、彼らはどんなに怒り出すだろう……。

栄造、言いながら卓袱台を片づけ、毛布を出す。
そしてベッドに腰掛ける。
明かりが変わる。

6・病室（2）

夕方。
雨の音が続く。
おれい、現れる。

おれい　あら。
栄造　（振り返り）あ、おかえり。
おれい　来てたの。
栄造　大丈夫かい？
おれい　何？
栄造　ずいぶん遅いから心配したよ。
おれい　あぁ。道に迷ってしまったの。
栄造　え？
おれい　廊下を一つ間違えたらしいの。
栄造　あぁ……。
おれい　何？
栄造　ん？　いや。あ、そうだ、これ。

栄造、懐から新聞紙にくるまれた荷物を取り出す。

栄造　冷めるといけないと思って、懐に入れておいたんだ。（と包みを）
おれい　（受け取り）何？
栄造　カツレツ。
おれい　カツレツ？
栄造　うん。このあいだ、食べたいって言ってただろう？
おれい　あぁ、どうもありがとう。
栄造　冷めないように、毛布の中に入れておくといい。熱があるから、きっと僕より温まるよ。
おれい　うん。（カツレツを毛布の中にしまう）……ねぇ、栄造さん。
栄造　ん？
おれい　「ほう」という字があるでしょう？
栄造　ほう？
おれい　ご存知？
栄造　どんな字だい？
おれい　ほら、お稲荷さんなんかによくある、あの、「たてまつる」という字。
栄造　あぁ。「奉納」の「奉」だね？
おれい　その下に、「やす」という字は何のことなの？
栄造　やす？

おれい　安心の「安（あん）」。
栄造　「奉安（ほうあん）」かい？
おれい　ホーアン？
栄造　ホウアン。
おれい　その奉安て、どういうこと？
栄造　安んじ奉る。けど、それだけじゃわからないな。いったいどこでそんな字を見たんだい？
おれい　さっき、道に迷ってるとき、そんな字の下に「室」（と、指で書き）という字を書いた看板が出ている部屋があったのよ。灯りがついてて、綺麗に飾ってあるから、何かしらと思ったの。
栄造　……。ほら、お入り。冷えるから。また熱が出るといけない。

栄造、おれいの膝に毛布を掛けてやる。
おれい、自分の指を見ている。

栄造　どうしたの？
おれい　どうして動くのかしら？
栄造　え？
おれい　どうして指が動くのかしら？

栄造　……。
おれい　学校の花壇に菊が植わっていたのを覚えてる？
栄造　菊？
おれい　音楽室の窓の下に、菊の花が咲いていたでしょう？
栄造　あぁ……。
おれい　花弁（はなびら）の幅が、ちょうど人の指くらいで、それが幾枚も垂れ下がっていて……放課後、見つめていると、そのうちの一枚が、なんだか微（かす）かに上へ向いて動いているような気がしたの。そうして不意に萼（がく）から離れて、土の上にぽとりと落ちて……。
栄造　……。

雨の音が止む。

おれい　あたしね、いろいろ考えてみたの。
栄造　考えるって、何を？
おれい　はじめは、もう一度だけでいいから、よくなって、この病院を出たいと思ってたの。けど、今は、このまま死んでもいいと思うの。
栄造　何をバカなことを！　早くよくなるつもりで元気を出さなきゃ。
おれい　だって、あたし、ちっとも怖くないんですもの。耶蘇を信心するせいかもしれないけど、天

国というところがわかってきたの。
栄造　耶蘇？　耶蘇教を信仰しだしたのかい？
おれい　ええ。
栄造　だって、あんなに嫌ってたじゃないか。
おれい　なんだか、ありがたいご宗旨のようだわ。ここの患者は、たいがい信者なのよ。ときどき院長先生が廊下で演説なさるの。そのお話を聞いて、あたしたち、お祈りするのよ。それ以来、あたし、どうも不思議なことがあるのよ。
栄造　不思議なこと？
おれい　目をつぶっていても、いろんな物が見えるらしいの。
栄造　何だって？
おれい　こうして指をまぶたの上に持って行くと、ちゃんとその数だけ指の形が目に見えるの。
栄造　そんなバカな。あまりヘンなことを考えてはダメだよ。おれいは昔から、信心深いとこがあるから、気をつけないと、すぐにおかしな方へ迷い込んでしまう。
おれい　栄造さん。
栄造　ん？
おれい　もしも私が死んだら、私のこと、忘れてくださる？
栄造　え？
おれい　最初から何もなかったみたいに。
栄造　……何を言ってるの。

おれい　だって毎晩毎晩、猫が鳴くんですもの。
栄造　猫？
おれい　きっと、あの猫が鳴くんだわ。あたし、目をつぶっていても、何だってはっきり見えるのに、あの猫だけは、どこに隠れているのかしら？
栄造　おれい……？

おれい、歩き出す。

栄造　おれい……？　おい、どうした？

栄造、おれいの肩を掴む。

おれい　（手をふりほどき）触らないで！
栄造　おれい……。
おれい　浮気者……。
栄造　え？
おれい　浮気者、浮気者！

おれい、栄造のスーツの胸をつかみ、揺さぶる。

栄造　おれい……。

と、鉦の音。

おれい、憑き物が落ちたようにすっと手を放す。

おれい　エス様にお話ししなくちゃ。

おれい、去る。

栄造だけに明かりを残し、まわりが暗くなる。

栄造　……十二月二十五日、小春のようなクリスマスのお午（ひる）に、おれいは死んだ。看護婦にミカンの皮をむいてもらって、半分食べたまま死んだそうだ。急変の知らせを受けて、駆けつけたときには、間に合わなかった。おれいは、奉安室に移されていた……。

川の音。

栄造、しゃがんで、川の水面を見つめている。

7・川岸

川の音が続く。
栄造の背後に、春子、鼻歌交じりで現れる。

春子　ちょっと！　何してるんです？！
栄造　え？
春子　早まったことをしてはダメ！
栄造　あ、いや、べつに……。
春子　人間、生きてれば必ずいいことだってあるんですから。こんなあたしにだって、春がきたんですから！
栄造　誤解ですよ。
春子　え？
栄造　僕はただ、水鳥（みずとり）を眺めていただけで……。
春子　水鳥？
栄造　ええ。ほら（と、指さす）水車尻の渦の周りを泳いだり、潜ったりしてるでしょう？
春子　……あぁ、なんだ、そうだったんですか。あたし、てっきり……。ハハハ、もう、やだ。‘
（と、栄造を叩く）
栄造　あ痛っ……。あなたこそ、こんな時間に、こんなところで、何してるんです？

春子　あたし？　あたしは、デートなんです。
栄造　デート？
春子　デートの待ち合わせ。
栄造　あぁ。
春子　川向こうに洋食屋さんができたんですって。そこで美味しいカツレツをごちそうするからって、岩佐さんが。
栄造　岩佐？
春子　だけど遅いなあ。早くしないと、洋食屋さん、閉まっちゃう。場所、間違えてるのかしら？

春子、去る。

栄造　（それを見送り）……。

川の音。

作家　（声）ノラやー、ノラやー。

提灯を手にした作家が現れる。

作家　ノラやー、ノラやー、どこにいるんだい？　出ておいで、ノラやー、ノラ……。

作家、提灯の明かりで栄造の姿を認める。

作家　おー、びっくりしたあ！
栄造　あなたは、蕎麦屋の……。
作家　蕎麦屋？
栄造　どうされました？
作家　あぁ、猫を見ませんでしたか？
栄造　猫？
作家　（チラシを取り出し）こういう猫なんです。ノラって名前の。生後約一年半、背中は薄赤の虎ブチで、腹は純白、顔つきは優しくて、目は青くなく、髭が長い……。そういう猫です。
（と、チラシを渡す）
栄造　はぁ。……ん？！
作家　見ましたか？！
栄造　いや、ちょっと……。
作家　……。おかしいなあ。どこにいってしまったのか。ノラやー、ノラやー、どこにいるんだい？
ノラや……。

作家、去る。

栄造　（チラシに目を落とし）……。

と、冬子、提灯と買い物カゴを提げて現れる。

冬子　あ。

栄造　（顔を上げ）……？

冬子　や、違うんです。

栄造　え？

冬子　そうじゃないんです。誤解です。今、ちょうど、警察に届けようと思ってたとこなんですから。

栄造　警察？

冬子　ネコババするつもりなんか毛頭ありません。財布の中身には一切手をつけてません。本当です。信じてください。

栄造　いや、信じろといわれても……。

冬子　……そうですか。わかりました。じゃあ、こうしましょう。

冬子、買い物カゴから蝦蟇口を取り出し、札を一枚抜く。

冬子　はい、これ。（と、蝦蟇口を）
栄造　え？
冬子　あなたの取り分です。
栄造　え？
冬子　これだけあれば、象牙で作った煙管（きせる）だって買えます。
栄造　いやいや、ちょっと待ってください。言ってることが、わからない。
冬子　警察沙汰になんかなったら、今度こそ、あたし、家を追い出されてしまうんです。あの家を追い出されたら、もう、ほんとに行くところがないんです。
栄造　……。
冬子　大丈夫。あなたがネコババしたってこと、あたし、誰にも言いませんから。

鼻歌が聞こえる。

冬子　誰か来た！　早くしまって。（蝦蟇口を押しつける）
栄造　え？
冬子　早く早く！
栄造　あ、あぁ……。（と、しまう）

冬子、逃げ去る。
川の音。
女将、顔を団扇で扇ぎながら、鼻歌交じりで現れる。

栄造　あ。
女将　あら。
栄造　……。（咳払い。蕎麦屋での要領で）どうも。
女将　こんなところで何してるんです？
栄造　……あ、いや……。そういう女将さんは？
女将　あたし？　なんだと思う？
栄造　さぁ。
女将　デートなの。岩佐さんと。
栄造　岩佐と？
女将　川向こうの洋食屋さんで美味しいカツレツをごちそうしてくださるんですって。
栄造　……。
女将　あら？　あなた、その顔は……。
栄造　え？
女将　さては、お金を拾ったわね？
栄造　え？

女将　隠したってダメよ。ちゃんと顔にそう書いてあるんだから。
栄造　いや、違うんです。今、警察へ届けに行くところです。
女将　どこで拾ったの？
栄造　いや、それは……。
女将　ずいぶんたくさん？
栄造　どうでしょう？　たぶん、象牙の煙管が買えるくらい……。
女将　なあんだ、たったそれっぽかし。んなもん、捨てておしまいなさい。
栄造　いや、しかし……。
女将　じゃあ、こうしましょう。あたしが、あなたの代わりに警察に届けておいてあげる。ほら、出しなさい。ほら。
栄造　……。（後ずさる）
女将　出しなさいって。
栄造　いやです。
女将　どうして？
栄造　そんなことといって、ネコババするつもりなんだ。
女将　出しなさい。
栄造　イヤだ。
女将　出せ！
栄造　出さない！

女将　泥棒！
栄造　え？
女将　みなさーん、こいつ泥棒です！
栄造　いや、ちょっと……。
女将　お巡りさーん！

栄造、走って逃げ去る。

女将　あ、待て、泥棒、泥棒！

女将、栄造を追いかけて去る。
川の音。
ややあって、栄造、戻ってくる。
その背中に秋子がしがみついている。

栄造　放してください！
秋子　いやです。
栄造　放して！
秋子　放しません。やっと捕まえたんだもの。

栄造　だから違うって言ってるじゃないですか。僕はノラなんかじゃありませんよ。
秋子　嘘！
栄造　嘘じゃありませんて！
秋子　ノラじゃないなら何なんです？
栄造　だから、ノラ以外の何かですよ。
秋子　そんな口から出まかせ言って。
栄造　だって、ほら（と、作家からもらったチラシを出して）、見てください。ちっとも似てないでしょう？
秋子　似てるとか似てないとか、そういう問題じゃないんです。
栄造　そういう問題ですってば！　ほんと、いい加減にしないと警察呼びますよ。
秋子　何かにつかまっていたいような気持ちなんです。
栄造　え？
秋子　何なのかしら、この気持ち。あてもなく野原を歩いてるみたい。辺りがしんと静まりかえって、空も大地もだんだん縮こまってくるような……。
栄造　……。
秋子　コイ。
栄造　恋？

秋子、栄造から離れ、川岸にしゃがむ。

秋子　ほら、あそこ。鯉が泳いでる。
栄造　あぁ、鯉……。
秋子　背中のヒレがそそり立ってる。
栄造　ええ。
秋子　ゆっくり体をくねらせて……。

二人、鯉を眺めている。

秋子　でも、どうしてかしら？　月もないのに川底にくっきり影が映ってる。
栄造　（川底を見て）……。
秋子　水がこんもり盛り上がって……、なんだか手招きされてるみたい……。

秋子、ゆっくり立ち上がる。そうして川に入って行こうとする。

栄造　あ、ちょっと！

栄造、秋子の手を掴む。

秋子　きゃあ！（手を振りほどき）何するんです？
栄造　え？
秋子　人妻ですよ？

秋子、去る。

栄造　……。

乙川、提灯を持って現れる。

乙川　おっかしいなあ……。
栄造　乙川……。
乙川　ん？　あぁ、なんだ、君か。こんなとこで何してるんだい？
栄造　や……。そういう君は？　何か、探し物かい？
乙川　あぁ。どうもこの辺りで蝦蟇口を落としたようなんだ。
栄造　蝦蟇口？
乙川　弱ったなあ。あれがないと倅にランドセルを買ってやれない。
栄造　……もしかして、これかい？
乙川　あ。（奪い）そうそう、これこれ！　なんだ、君が拾ってくれてたのか。どこに落ちてた？

栄造　ていうか、死んだんじゃなかったのかい？
乙川　死んだ？
栄造　熱を出して……。
乙川　熱？　誰が？
栄造　いや、だって、岩佐が……。
乙川　岩佐？　岩佐に、会えたのかい？
栄造　え？　あぁ。
乙川　金は、何とかなりそうかい？
栄造　んん、まぁ。
乙川　そうか。よかったじゃないか。また困ったことがあったらいつでも訪ねてきてくれよ。同級生なんだから。格安で相談に乗るよ。
栄造　うん……、ありがとう……。

乙川、さっき女将の座っていたあたりに腰掛ける。

乙川　ぅお！（と、立ち上がる）
栄造　ど、どうした？
乙川　ひょっとして今、ここに誰か座ってなかったかい？
栄造　え？　あぁ……。

乙川　どうして黙ってた？
栄造　え？
乙川　僕のことをハメたのか？！
栄造　いや、僕は何も……。
乙川　恩を仇で返すとは……。君みたいな男とは絶交だ！　二度と顔も見たくない！
栄造　あ、ちょっと、乙川……。

乙川、去る。

栄造　……。あれ？　水鳥がいない。

と、反対側から、女、提灯を手に現れる。

女　死にました。
栄造　え？
女　水鳥は死んでしまいました。
栄造　……。
女　こんなお験（しるし）に遭っても、まだ神様のいらっしゃることを信じませんか？　さあ、参りましょう。

女、栄造の背後を横切る。

栄造　やはり三途の川を渡ったんでしょうか？
女　（立ち止まり）はい。
栄造　耶蘇でも……、耶蘇でも三途の川を渡るんでしょうか？
女　……提灯をともしてお迎えをたてるという程でもなし、なし。参りましょう。すっかり日も暮れてしまいました。

女、去る。
栄造、女についていく。
川の音、大きくなる。
溶暗。

8・書斎（2）

夜。
中央の小上がりで、岩佐が原稿を読んでいる。

秋子　（声）お春、お春。

秋子、現れる。

秋子　お春。あら、岩佐さん。
岩佐　あ、奥さん、お邪魔してます。
秋子　……あら？
岩佐　何です？
秋子　その顔、どうしたの？
岩佐　はい？
秋子　大きさが倍はある。まるで別人みたい。
岩佐　倍って、まさか……。けど、少し太ったかな？
秋子　太ったなんてもんじゃないわよ。むくんでる。ふくれあがってる。まるで土左衛門みたい。
岩佐　土左衛門？

秋子　顔の輪郭が二重になってるじゃない！
岩佐　（顔を触り）……冗談でしょう？
秋子　そうなの？
岩佐　はい？
秋子　なんだ、冗談か。びっくりしたあ。
岩佐　……。
秋子　お春、見ませんでした？
岩佐　え？
秋子　お春。
岩佐　お春ちゃん？
秋子　うん。
岩佐　いえ。今日は、見てませんけど……。
秋子　どこ行っちゃったのかしら？　夕飯の買い物、頼みたかったのに……。

岩佐、秋子を見つめている。

秋子　何？
岩佐　え？
秋子　！　人妻ですよ？！

岩佐　あ、いや……。そうそう、奥さん、これ、お読みになりました？

秋子　え？

岩佐　先生の新作。

秋子　あぁ、ちらっとね。

岩佐　これは、どういうんでしょう？

秋子　どういうって？

岩佐　ここ。

岩佐、秋子に原稿を渡す。

秋子　（読んで）月が西の空に傾いて、夜明けが近くなると、西の方から大浪のような風が吹いてきた。私は風の運んでくる砂の匂いを嗅ぎながら、これから件に生まれて初めての日が来るのだなと思った。すると今までうっかりして思い出さなかった恐ろしいことをふと考えついた。件は生まれて三日にして死し、その間に人間の言葉で未来の凶福を予言するものだという話を聞いている。こんな物に生まれて、いつまで生きていても仕方がないから、三日で死ぬのは構わないけれども、予言をするのは困ると思った。だいいち何を予言するんだか見当もつかない。

岩佐　僕の読解力が、あれなのかもしれませんけど、これ、この「件（くだん）」。顔が人間で身体が牛のあさましい化け物みたいに読めるんですが。

秋子　あたしも、そう読んだわよ。
岩佐　ですよね？
秋子　それが何？
岩佐　いや、なんで牛の化け物が未来の凶福（きょうふく）を預言するのかなあって。なんででしょう？
秋子　さあ、あたしに聞かれても。書いた本人に聞いてみたらいいじゃない。
岩佐　ええ……。

どこからか作家の声がする。

作家　（声）ノラや、ノラや……。
秋子　あ。帰ってきた。じゃ、あたし、ちょっと買い物に行ってくるから。
岩佐　あ、はい……。

秋子、去る。

岩佐　（手で顔をさすり）……。

作家、現れる。

作家　おかしいなあ。あ、なんだ、岩佐くん、来てたのか。
岩佐　あ、おかえりなさい。すいません。原稿、拝読してました。
作家　あぁ。構わんよ。どうせ君んとこの雑誌に載せるんだ。……で、どうだった？
岩佐　はい？
作家　読んでみて。感想は？
岩佐　あぁ……、傑作ですね！
作家　そうかい？
岩佐　ええ。日本文学の事件ですよ。
作家　いやいや。
岩佐　ところで、今日は、ノラの姿が見えないようですが……。
作家　ん？　あぁ、そうなんだよ！　まったくどこへ行っちゃったんだろう？　いつもエサの時間には戻ってくるんだが……。
岩佐　（腕時計に目を落とし）あ、もうこんな時間ですか。僕、そろそろ行かないと。
作家　何だい、帰るのかい？
岩佐　これから、ちょっと野暮用で。
作家　野暮用？
岩佐　中学時代の同級生と会う約束なんです。なんでも折り入って頼み事があるとかで。
作家　君、こないだもそんなことを言ってなかったかい？
岩佐　そうですか？

作家　言ってたよ。
岩佐　そうでしたかね？　どうも季節の変わり目は記憶が曖昧で……。
作家　気をつけたまえよ。今日の君は、どうも影が薄いから。
岩佐　影？
作家　ほら。（と岩佐の足下を指さす）
岩佐　（見て）……。またまた、先生まで、気味の悪い冗談を言って、あんまり脅かさないでくださいよ。僕の影は、いつもこんなもんですよ？
作家　そうかい？　でも用心するに越したことはない。
岩佐　わかりました。気をつけます。じゃあ、この原稿、いただいていきますね。
作家　あぁ。
岩佐　また近いうち顔出しますから。
作家　うん。
岩佐　では。

岩佐、会釈して去る。
岩佐が去ったのと反対側から、マスクをした春子、そろりと顔を出す。

春子　……お帰りになりました？
作家　うおー、びっくりしたあ！　……なんだ、お春、いたのか。

春子　……。
作家　どうした、マスクなんかして？　風邪でもひいたのかい？
春子　そうじゃないんです。
作家　じゃあ、なんだい？
春子　……言いたくありません。
作家　え？
春子　言ったって、どうせ信じてもらえないし。どうせ、こんな女中の言うことなんか……。
作家　何だよ？　いじけたことを言うもんじゃないよ。
春子　じゃあ、信じてくださいます？
作家　そりゃあ、聞いてみなけりゃわからないけど。
春子　ほら！　どうせ信じてもらえないんだわ。
作家　わかった、わかった、信じるよ。
春子　ほんとですか？
作家　ほんと、ほんと。だから言ってごらん。
春子　……口の中に、毛が生えだしているらしいんです。
作家　……。毛？
春子　それが、ゆうべからどんどん伸び出して、さっき洗面所の鏡で見たら、唇の端から、真っ黒い毛が、ちょろっとのぞいていたんです。
作家　……。

春子　どうしましょう？
作家　どうしましょうって……、いやいや、そんなバカな話があるもんか。
春子　信じるって言ったのに！
作家　いや、信じるよ、信じてるけども……、しかし、困ったな。また、なんでそんなことになったんだい？
春子　わかりません。
作家　何か心当たりはないのかい？
春子　心当たり？
作家　たとえば、最近、寝不足だとか？
春子　毎日八時間寝ています。
作家　寝る前に歯を磨かなかったとか？
春子　朝晩ちゃんと磨いてます。
作家　じゃあ、何か、おかしなものでも食べたとか……？
春子　……カツレツ。
作家　何？
春子　ゆうべ、カツレツを食べました。
作家　カツレツ？
春子　川向こうの洋食屋で……あ！

春子、手で口を押さえて背中を向ける。

作家　ど、どうした？　お春、お春……。

春子、マスクを顎の下にズラして再び前に向き直る。
手の指の間に、ごっそり抜けた黒い毛。

作家　ひ！

春子　こんなんじゃ、あたし、お嫁に行けない……。カツレツなんて食べるんじゃなかった！

春子、毛を床に叩きつけ、顔を両手で覆い、走り去る。

作家　……。

作家、爪先で毛をつついてみる。
おそるおそる指でつまみ上げる。
音楽。
暗転。

9・薬屋（2）

中央の小上がりで、乙川がソロバンをはじき、帳簿をつけている。
下手の小上がりで、冬子が眠そうに丸薬を揉んでいる。

乙川　あー、これだ、これだ。貸借（たいしゃく）が逆になってる。どうりで数字があわないわけだ。そうか、そうか、そういうことか。

乙川、何やら帳簿に記入する。
そしておはぎを食べる。

乙川　お冬もお食べ。

冬子、ぐらぐらと船をこぎ、やがていびきをかきはじめる。

乙川　……。おい、お冬。お冬！

獣のようないびき。
冬子、うなされている。

乙川、その様子が心配になり、冬子の傍らへ行く。

乙川　（冬子の両肩を掴んでぐらぐら揺さぶる）おい、お冬、どうした、お冬！

冬子、ギャッと声を上げて目を覚ます。

冬子　あぁ、あぁ、怖かったあ……。
乙川　どうした？
冬子　……あ、すみません。ゆうべ、遅くまで丸薬を揉んでいたものですから……。
乙川　悪い夢でも見たのか？
冬子　はい……。
乙川　どんな夢だい？
冬子　……。（首を横に振る）
乙川　なんだい？　言ってごらん。
冬子　口にするのもおぞましい……。
乙川　そういう悪夢は、口から出してしまった方がいいんだよ。
冬子　そうなんですか？
乙川　そうだよ。

冬子　……あたしが眠っていると、疱瘡神（ほうそうがみ）が、迫ってくるんです。
乙川　ホーソーガミ？
冬子　はい。あたし、逃げようと思って必死で身もだえするんですけど、ちっとも体が動かないんです。それで、疱瘡神が「お冬、お冬」って呼びながら、後ろから近づいてきて、あんこのついた手で、あたしの両肩を掴んでぐらぐら揺さぶるんです。おい、お冬、どうした、お冬！って。それであたし、大きな声を出して、目が覚めたんです。
乙川　……。（手を見つめる）

母、茶封筒を手に現れる。

母　お冬。
冬子　ひぃ！
母　牛男、見なかったかい？
冬子　え？　……あぁ、坊ちゃまでしたら、お友達と、いつもの空き地へ。
母　そうかい。あ、そうそう、これ。今月のお給金。
冬子　あ。

冬子、立ち上がり、母から封筒を受け取る。

冬子　ありがとうございます。
母　無駄遣いするんじゃないよ。
冬子　はい。

冬子、封筒の中身を改めつつ、下手の小上がりに戻る。

母　（乙川に）夏子さんは？
乙川　同窓会だそうです。
母　まあた、同窓会？！　ほっつき歩いてばかりで、ちっともウチの仕事をやりゃしない。だからあたしは結婚に反対したんだよ。
乙川　今さらそんなこと……。
母　そんな昔のことばかり懐かしんでどうすんだい？
乙川　いいじゃないですか、同窓会くらい。
母　おまえがそうやって甘やかすから。こないだだって糠床ダメに……。
乙川　（鬱陶しさから逃げるように）おい、お冬。
冬子　はい。
乙川　ちょっと、煙草買ってきてくれ。
冬子　はい。

と、乙川、冬子に小銭を渡す。

乙川　お釣りで飴でも買いなさい。お冬の分と、牛男の分と。
冬子　わかりました。じゃ、ちょっと行って参ります。
乙川　落とすんじゃないぞ。
冬子　了解です。

冬子、去る。

母　だけど、ほんとに同窓会なんだろうね？
乙川　え？
母　夏子さん。外で、やましいことでもしてるんじゃなかろうね？
乙川　何です、やましいことって？
母　尻の軽い女だからさ。
乙川　よしてくださいよ、そんなふうに言うの！　息子の嫁ですよ？
母　現におまえだってたぶらかされたんじゃないか。
乙川　母さん！
母　まあ、すっかり丸め込まれちゃって。丸薬みたいに。
乙川　……。（仕事に戻る）

母　……あたしだってこんなこと言いたかないんだよ。
乙川　じゃあ言わないでください。
母　実は、こないだ、男がここを訪ねてきたんだよ。
乙川　（手を止め）え？
母　夏子さんに会わせてくれって。
乙川　男？
母　これはおまえには黙っておこうと思ったんだけどね。
乙川　誰です？
母　さぁ。汚い縞の着物を着てさ、顔にぶつぶつしたものが出て……、ありゃ、疱瘡（ほうそう）じゃないかね。
乙川　疱瘡……？
母　うん。
乙川　どうして、そのこと、今まで黙ってたんです？
母　ぶつぶつかい？
乙川　男が訪ねてきたことですよ。
母　だって、おまえ、泣くだろう？
乙川　泣きゃしませんよ。
母　そうかい？
乙川　子供じゃあるまいし……。しかし、そんな男が夏子に何の用です？

母　あたしも、そう思って聞いたんだよ。「あなたみたいなぶつぶつが、うちの嫁に何の用です？」って。体をこう、反らし気味にしてね。うつされたんじゃかなわないからさ。

乙川　……。

母　そしたらその男がいうんだよ。

乙川　なんて？

母　水を飲ませてもらいたいって。

乙川　水？

母　自分はもう助からないから、夏子さんに末期（まつご）の水を頼みたいって。大の男が、おいおい泣いて。気味が悪いから塩まいて追い返してやった。

乙川　……。

と、猫の声。

母　何だい？！

乙川　あぁ、猫じゃないですか？

母　猫？

乙川　最近、野良猫が来るんですよ。勝手口で、お冬が餌をやるもんだから。

母　なんだ、野良猫。あたしはまたてっきり、あのぶつぶつが……。

猫の声。

母　鰹節でもくれてやるかね。

母、去る。

乙川　……。

乙川、ソロバンをはじく。

溶暗。

１０・勝手口

母　（声）ノラやー、ノラやー。

明かりがつく。
母が、鰹節を手に現れる。

母　ご飯ですよー、ノラやー。……どこに行っちゃったのかしら？　出ておいで、ノラやー……。まったく、もう！　呼んでもないのにやって来て、こっちがその気になれば、いなくなる……。

栄造、現れる。

栄造　こんなところにいたんですか。
母　え？
栄造　探しましたよ。
母　……あの、以前、どこかで会いました？
栄造　覚えてないんですか？
母　……。
栄造　僕ですよ、お母様。

母　え？
栄造　あなたの息子です。
母　何を言ってるの？
栄造　生まれないで済んでしまったけれど、あなたの本当の息子です。
母　バカなこと言わないで！
栄造　僕はいつでもお母様のことを思っていたんだ。なのにお母様は一度だって僕のことを思ってくれない。だから僕は寂しくて……、それであのとき、ついて行ったんです。
母　……。
栄造　僕を息子と呼んでください。
母　よしてよ、気味が悪い！
栄造　気味が悪い？
母　近寄ると、警察呼ぶわよ！
栄造　……。わかりました。じゃあ、これだけ教えてください。
母　何？
栄造　お父様の声は、僕の声のようでしたか？
母　え？
栄造　僕は父さんの声が聞きたい。
母　知らないよ、あんたの父さんなんか！
栄造　……。

母　早く、どっか行ってちょうだい！
栄造　そうですか……。

栄造、去る。

母　（それを見送り）……。

おれい、現れる。

おれい　それは、あなた、いけませんです。
母　え？
おれい　神様は、いらっしゃいます。
母　……。
おれい　……ご存じありませんか？　洋食屋さん。
母　はい？

母は空耳を聞いたらしい。

おれい　おいしいカツレツを食べさせる洋食屋さんが、このへんにできたって聞いたんですけど。

母　あぁ、洋食屋……。
おれい　はい。
母　洋食屋なら、橋を渡った川の向こうに……。
おれい　川の向こう？
母　ええ。
おれい　なんだ、栄造さん、栄造さん。

栄造、現れる。

栄造　ん？
母　！
おれい　川の向こうですって。逆方向。
栄造　川の向こう？
おれい　今、この方に教えていただいたの。
栄造　あぁ。
おれい　どうりで見つからないわけだわ。
栄造　（母に）どうも、すみません。
母　あ、いえ……。

作家、現れる。

作家　ノラや……、ノラ……。（母を認め）ノラを見ませんでしたか？
母　え？
作家　こういう猫なんです。（と、チラシを）
母　いえ。
作家　（おれいに）見ませんでしたか？
おれい　いいえ。
作家　（栄造に）見ま……。
栄造　いえ。
作家　……。おかしいなあ。どこへ行ってしまったのかなあ。ノラや、ノラや……。

作家、去る。

おれい　（母に）どうもありがとうございました。（栄造に）行きましょう。
栄造　うん。

栄造、おれい、会釈して、去る。

母　（それを見送り）……。

ギリギリという音。

母　……。（ゆっくりと、川の向こうへ歩き出す）

と、乙川が駆けて出てくる。

乙川　母さん！

母　！（立ち止まる）

乙川　たいへんです。今、警察から電話があって……。

母　警察？！

乙川　お冬が、川に落ちて、死んだそうです。

母　……お冬が？！

乙川、去る。

続いて母、去る。

川の音。

暗転。

１１・小料理屋（２）

川の音が遠くなる。
上手の小上がりに、岩佐、秋子、冬子、母。
傍らに女将。

女将　枝豆二つ、いか納豆二つ、猫の味噌煮込み一つ、冷やし水鳥三つ、牛の一本漬け一つ。
秋子　あと、カツレツ。
冬子　あたしも。
母　あたしも。
岩佐　僕も。あと牛乳。
女将　カツレツ四つと牛乳。以上ですね。

女将、去る。

岩佐　……顔の輪郭などは、はっきりしないけれども、いい女じゃないか。（手にお猪口）
母　（手に徳利。お酌してやる）
秋子　だけど誰かの妾でしょう？
岩佐　かまいやしないさ。

冬子　すぐに事がばれてしまうわ。
岩佐　大丈夫。そこはうまくやるから。
冬子　うまくって、ねえ。
母　ねえ。
岩佐　何？
秋子　あんな輪郭のはっきりしない女なんて。
母　後で困るに違いないわ。
岩佐　そう？
母　そりゃそうよ……。

会話の途中で、下手の小上がりに、作家、春子、現れる。

春子　泊まっていくのかと思ったのに！
作家　しっ！（声を潜めて）だって先生がまた帰るだろう？（大声で）女将さあん。お酒。
女将　（声）はあい。
春子　心配しないでもいいのよ。
作家　するよ。
春子　今夜はおおかた夜明けまで据えても、まだ済まないくらいだもの。
作家　据えるって？

春子　牛のお灸よ。
作家　何？
春子　牛のお灸。
作家　牛のお灸？！
春子　いくじなし。
作家　そんなこといったって……。

おれい、乙川、現れる。

おれい　いけないわ、そんなこと。
乙川　どうして？
おれい　だって、また、つねるつもりでしょう？
乙川　つねっちゃダメかい？
おれい　ダメなことはないけれど。
乙川　なら、おいでよ。
おれい　でも。
乙川　恥ずかしがることないじゃないか。
おれい　なんだか、ひやひやしちゃう。
乙川　ひやひや？

おれい　ええ。
乙川　だったら君もつねればいいじゃないか。
おれい　あたしが？
乙川　そうさ。そうすりゃ、お互い様さ。
春子　あたしだって、つねられたいわ。
作家　つねってるじゃないか。
春子　あんなの、つねってるうちに入らない！
秋子　（岩佐に）つねるの？　あなたも。
岩佐　そりゃ、まあ、僕だって。
冬子・母　まあ！
冬子　（岩佐に）強く？　ねえ、強く？

女将がお盆に徳利を載せて現れる。

女将　おまちどうさま。（と、作家のところへ徳利を置く）
作家　（春子に）皿鉢小鉢てんりしんり。

一瞬の間。
春子、栄造を除く全員が、その言葉にどっと笑う。

女将　まあ、いやだ、先生ったら、ご冗談ばっかり。
岩佐　まあ、仕方がない。あんなになるのも、こちらのせいだ。ちと、失敬。ご不浄、ご不浄。

岩佐、下手に移動。

春子　あの！
岩佐　……はい？
春子　失礼ですが、以前、どこかでお目にかかりました？
岩佐　僕ですか？
春子　ええ。以前、どこかで……。
岩佐　さあ。人違いじゃありませんか？
春子　でも、確かに……。
岩佐　（その口に指を当て）あなたみたいに顔の輪郭がはっきりした女を、この僕が忘れるわけがありません。（と、春子の頭をポンポンする）
春子　……。

岩佐、去る。
春子、ついていく。

女将、春子の後についていく。
作家、秋子を認め、立ち上がる。

作家　ひょっとして、あなたは……。
秋子　え？
作家　いやいや、まさか、そんなはずはない。
秋子　何です？（立ち上がる）
作家　すみません。きっと人違いです。
秋子　はぁ。
作家　しかし、見れば見るほど、よく似てる……。（座る）

冬子、立ち上がり、乙川のところへ。

乙川　……何？
冬子　あたし、あなたと会った気がする。
乙川　え？
冬子　覚えてませんか？
おれい　まあ、そうなの？！　つねったの？！
乙川　あ、や……。

おれい　ふんっ！（下手前へ）
乙川　……。どこで会いました？
冬子　夢の中で。
乙川　夢？
冬子　ええ。

岩佐、春子と女将の肩を抱き、戻ってくる。

母　提灯をともしてお迎えをたてるという程でもなし、なし。
全員　（母に注目し）……。

一瞬、沈黙。
そして人々、また、どっと笑う。
と、蜂の音。

乙川　それは、それは、大きな蜂だった。
作家　熊ん蜂というのだろう。
乙川　親指ぐらいもある……。
岩佐　ビードロの筒に入れて紙で目ばりをすると蜂が筒の中を、上ったり下ったり……。

作家　唸るたびに、目張りの紙が、オルガンのように鳴った。
乙川　机にのせて眺めていると、子供が、くれくれとせがむんだ。
岩佐　強情な子でね、言い出したら聞きやしない。
乙川　それで、つい腹を立てて、ビードロの筒を持って縁側へ出たんだ。
作家　庭石に日が照っていた。
岩佐　ビードロの筒が庭石に当たって微塵に壊れた。
作家　蜂が、その中から、浮き上がるように出てきた。
乙川　そうして逃げてしまったよ。
作家　大きな蜂だった。
岩佐　ほんとに大きな蜂だった。
栄造　……お父様！

栄造、立ち上がる。
いつのまにか羽音は消えている。
川の音。

春子　月も星も見えない……。
秋子　月明かりさえない……。
冬子　暗闇の中に……。

おれい　土手の上だけ……。
女将　ぼうっと……。
母　薄白い明かりが……。
春子　流れている。
女将　流れている。
母　流れている。
秋子　その白んだ中を……。
冬子　男たちの後ろ姿が……。
おれい　ぼんやり……。
女将　尾を引くように……。
母　行くのが見えた。

霧が立ちこめる。

栄造　川波の寄せる岸で、長い間、水鳥を見ていた。けれど水鳥は私を見向きもしなかった。私の影を映した水が、底の方からゆらゆら揺れた。川の水かさが増しているらしい。どんどん増して、じきにこの岸も、水に沈んで見えなくなるだろう。恐ろしい波は、もう間近まで打ち寄せているらしかった……。

川の音。

乙川　そろそろ、また、行こうか。
作家　あぁ、そろそろ。
岩佐　うん、また、行こう。

全員、立ち上がり、後ろを振り返る。
ゆっくりと歩き出す。
急速に溶暗。
ギリギリという音。
完全な闇。
闇の中、水の音、大きくなる。
その音が不意に途切れる。
静寂。
再び明かりがつくと、舞台上には誰もいない。
卓袱台の上に徳利とお猪口、栄造の帽子。

〈幕〉

〈著作物使用許諾番号〉203639